〔本朝無題詩七 旅館〕於香椎宮賦所見之事　釋蓮禪

二月三旬韶景天、不圖客舍暫留連、紅霞礙日山林外、白鷺伺魚水巷邊、獻餅丁寧家僕切、○註略賣鹽子細土民傳、門前有賣鹽之者、戲問直法、予細答之、○下略

〔七十一番歌合〕卅八番　左　鹽うり

あきなひの秋のあたひも高潮の今宵ぞ月の名をもうるなる

思ひ初るむねのやきての鹽けぶりなびきなびかずせめてとはゞや

〔淺井三代記四〕淺井大津の浦より鹽を買取事

かくて敵寄來らざれば、十一月中旬○永正十三年までに、小谷城中堀塀柵不殘丈夫に拵へ、味方領分の年貢米等納取、城中へこめられ粮澤山なり、其上上坂の城より武具馬具等まで、悉く運び取ければ、一年二年籠城せしむとも、兵粮米秣等にとぼしき事あらじと悦びたまひけるが、是に難儀せしは、鹽城中に不足なり、いかゞ有べきと僉議せられて宣ひしは、宮川左治兵衛寛助左衛門尉は、兩人して今濱近邊にて賣人近付可有之間、才覺いたすべしと宣ひければ、兩人今濱の商人に賄をつかはし賴可申、畏候とて大津の浦へ行、鹽二三百俵買取候へども、著岸の便おだやかならざれば、此鹽は何方へうり申など、とがめられてはいかゞと思ひ、右の鹽を箱に入替へ、吳服櫃に事よせ、小舟五六艘に取乘、舟長に心を合せ、中濱といふ所へつけ、それより川船にのせ、馬渡川を心ざし、丁野村へ可著と相巧み、○中略丁野川原へ付、則助左衛門尉左治兵衛尉兩人、小谷に籠りゐる故、此旨注進したりければ、夜の間に小谷へ運び入る、

〔武將感狀記三〕北條ト今川ト相計テ遠州武州ノ鹽商人ヲ留テ、甲斐信濃ニ鹽ヲ入ズ、此ヲ以テ信玄ノ兵ヲ困ントス、謙信コレヲ聞テ、領國ノ驛路ニ令シテ、シホヲ甲信ニハコバシム、我ハ兵ヲ以テ戰ヒヲ決セン、鹽ヲ以テ敵ヲ窮セシムル事ヲセジト云送ラレケレバ、信玄受ラレタリ、